今月四日、朝起きてお内仏にお参りし、過去帳をめくり四日の日付のところを見ると、そこに「江本スガ」とあるのが眼に入りました。横に順静院釋尼貞悦昭和三十六年十二月四日　忍の曾祖母　行年八十六才とあります。「今日はスガばあちゃんの日だな」と確認して、「なんまんだぶなんまんだぶ」とお念仏したとき、スガばあちゃんも、こうやって朝起きて、このお内仏にお参りし、「なんまんだぶつなんまんだぶつ」とお念仏を称えたのだろうなあ、と会ったこともないスガばあちゃんを、身近に感じました。スガばあちゃんというのは、住職の曽祖母になる人で、住職が五才のときに亡くなったのですから、私は遺影でしか会ったことがありません。でも、そのときは、なんだかスガばあちゃんのことを懐かしいと感じました。スガばあちゃんは、嫁のスミエさんが長年脊髄カリエスを患い、床から起き上がることが出来なかった上に、四人の子どもを置いて四十五才で亡くなってしまったので、たいへんご苦労があったと想像されます。前住職深さんの母親であるスミエさんは、癇癪持ちで、寝床の中からあれこれスガばあちゃんに指図していたと聞きます。思うようにならない身体で、本人も家族もたいへんだったでしょう。スガ祖母ちゃんはおっとりして優しい性格の人だったようです。遺影のお顔からは、優しい柔和な人柄が偲ばれます。遺された四人の子どもが、前住職と叔父の二見さん、叔母二人です。スガばあちゃんの優しさ、スミエさんの気の短さは、江本の業として前住職や、常照さん、私の三人の子どもにも、受け継がれていることはすぐに分かりました。その家その家の業があることは、一般的によく理解できることです。

　スガばあちゃんが亡くなったとき、五才だった常照さんは、鼻に脱脂綿を詰めたこと、身体を拭いたこと、人はいつか死んでしまうのだと恐怖におののいたことを鮮明に覚えていると何度も話してくれます。そのときの強い衝撃は後に仏法を求める機縁に結びついたそうです。

　私は、その朝、いつもと特に変わりなく目が覚めたのですが、お内仏の過去帳にスガばあちゃんの名前を見て、人の話として聞いているだけだったスガばあちゃんが、自分と同じ江本の嫁だったことに、今さらながら気づき、脳裏の片すみにあった存在がとても身近に感じられたのです。　スミエさんにしても、スガばあちゃんにしても、江本家の嫁としてたいへん苦労の多い人生を送り、全うされて往かれたと改めて深い畏敬の念が湧いてきました。私は初めて、江本家の嫁という場所を与えられていたこと、私が何も知らずに大きな顔をして（うわべはしおらしく）、踏み入れた場所は、すでにスガばあちゃんやスミエさんが、その人生を全うして往かれた尊い場所であったことに、はじめて気づかされました。すべての衆生が仏になるためのご修行をされている仏さまを法蔵菩薩といいます。スミエさんやスガばあちゃんのご苦労は法蔵菩薩のご苦労ではないか、そこには、義父や義母も含まれて、すべてのいのちが私ひとりを救うために在（ましま）すということではないか・・・。家も土地も、空気も水も・・・

　私は自分が決断して住職と結婚し江本に来たと思っていたけれど、もっと深いところでは、仏さまが、ここがお前の浄土への道だ、ここしか無いと御縁をつけて下さった江本の家でした。場違いなところへ来て人生を誤ってしまったのだろうかと煩悶していた時期が長かったので、仏さまのお心に気づかずに申し訳ないことだったなあとお詫びさせていただきました。

　嫁というのは、どれだけ一生懸命家のために尽くしても、所詮嫁は嫁でしかない、他人でしかない、というのは、嫁歴数十年のベテラン嫁たちがよく口にするところです。そういう言葉を聞くと少し残念な気持ちがします。私には真似もできないくらい、家のためにご苦労されている立派なお嫁さんたちは、ご門徒の中にたくさんいらっしゃいます。もう一苦労して頂いて、法蔵菩薩のご苦労にまでひろがって頂きたいなあと、密かに願っているところです。

　なんまんだぶつ　なんまんだぶつ　　　　　合掌　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　法喜